

全身ゴムマリのような筋肉の塊りが、飛ぶように馬たちを追って疾駆していた。馬のたったのひと蹴りでふっ飛びそうな軽い身体が、眼を火にして走っている。馬たちは、あきらかに畏れていた。なぜ、その小さなものを畏れるのか、まだ判然とはしなかったが、鋭く、左に、右に曲線を描き、自由自在に走るその姿には、死の影を運ぶ使者たちの不気味さがあった。

一瞬の、鋭い攻撃だった。1匹が縞馬の前脚を噛み、もう1匹が腹に噛みついた。振り払おうとした馬の動きがとまり、脚が静止した。群れとなった馬たちは、先導獣を追って走り続けている。とり残された馬は、叫び声をあげるでもなく、抵抗するでもなく、ただ凝々と立ちつくしているだけだった。猫に似た野性動物たちは、攻撃の手をゆるめず、本能的に知っている戦法で次から次へと行動し、白い歯を赤く染めて、馬の後脚の筋肉を噛み、とどめを刺し終えると、腹のやわらかい肉を喰いちぎって、内臓をひきだした。馬は、その間、大きな眼で、遠くを見ているだけだった。もう眼の中に火はない。不安や畏れの色もない。空虚だけがあった。

見事な戦いぶりだった。馬の急所や弱点はすべて知りつくしての戦いだった。馬は、喰われるまま、長い間、立ちつくしていた。眼にこもる光が少しずつ弱くなっていく。立ち続けている限り、馬は馬だった。脚を喰われ、咽喉を喰われ、腹を喰われ、血を流し、もう、どこにも行くことができなくなつて、1歩も前へ進めなくても、自分の脚で立っている限りは、馬は馬というものに重なり合っていた。1歩も踏みだせぬまま、ただ立つという姿勢を支えているだけで、馬の権威は

あり、馬としての最後の姿を示していた。それは、まだどこにもなかった。ただ、眼の色に影らしきものが射した。もう時間の問題だった。血に濡れた眼はきらきら光っている。

前脚が大きく曲って、バランスをうしなつた馬が地面に音をたてて崩れ落ちたとき、馬は馬自身をやめてしまつて、傷ついた大きな肉の塊りとなつたかに見えた。そして、それがどこからともなく現れた。死だ。死が死にびつたりと重なりあつたとき、もう馬はどこへ行くことができなくなつて、何か、得体のしれぬ別のものへと変わっていた。

X氏は、赤い髪の女がいる店で、昼間、ないと感じたときのそれは、馬が馬でなくなった瞬間に現れたそれと同じものだと思つた。

テレビのスイッチを切つた。

もう完全に夜だった。もうすぐ日曜日も終つてしまふ。頭の芯が熱を帯びている。深夜だ。上手く眠れるだろうか。馬の眼の、遠いところを眺める空虚がX氏の心を叩き割り、泡立たせた。走つて、走つて、最後に馬がたどり着いたところはどこだったのだろう。あの空虚な眼に映つたものは何か。はつきりと見ていたはずだが、どうしても、その場所が見えてこない。あれが馬に来たその瞬間、草原の光景がまっ白になつた。2〜3秒も見続けられぬもの、考え続けられぬもの、まだ誰も名付けられぬものがある。X氏は、2秒と触れられぬものがあるのを知っている。頭が壊れてしまふか、もとの自分に、自分の場所に戻れなくなつてしまふ、あれ。いったい、何が起つたの